報　告

「BE KOBE　神戸の近現代史」発信プロジェクト

行財政局業務改革課

1．はじめに

神戸は、六甲の山々と瀬戸内海、豊かな田園風景、そして近代の名残を街中の随所に留めた都市である。その歴史を顧みると、桜ヶ丘銅鐸、五色塚古墳、源平の史跡、西国街道、旧居留地、異人館、海上都市と、それぞれの時代の表舞台に刻まれたさまざまな姿が見える。そして地域に受け継がれてきた文化と異国から来た文化が生活の中で出会いながら、脈々と今に引き継がれている。

このような中、とりわけ1868年1月1日の兵庫開港以降の近現代の歴史は、あまりに市民生活の中に溶け込んでいるためか、意外と意識されることが少なく、改めてその歴史を語ろうとするとかえって難しさを覚えるのが率直なところであった。そこで、神戸の歴史の中で特に近現代史に焦点を当てて発信する取り組みを企画することとなった。

当稿は、企画から原稿執筆、校正、ホームページ上での特設サイトの立ち上げ・発信、市民向けイベントの開催等、一連の取り組みを記録するとともに、神戸の近現代史の発信について今後を展望するものである。

2．経緯

①企画段階

明治期以降の神戸の近現代の歴史については、1994年1月刊行の『新修神戸市史 歴史編Ⅳ 近現代』を中心に詳しく編纂されている。しかしながら、一般的に市史を紐解く機会は少なく、時系列及び分野ごとにわかりやすく再整理して発信することが重要であると従来指摘されてきた。

この指摘を受けて、企画調整局・行財政局において、近現代史をわかりやすく発信するための枠組みについて検討を開始した。現在、市史編集室は、行財政局業務改革課文書館に事務局が置かれており、今回の取り組みも文書館により監修を行うことが適切であるとの結論を得た。これを進めるにあたっては、以下の３点に注力した。

・市民に発信する前段階として、職員がまず神戸の近現代史を理解することが肝要であり、従来の編集委員会の形態を採るのではなく、行財政局業務改革課を事務局として、若手職員を中心に広く庁内職員にこのプロジェクトへの参画を呼び掛けることから始めた。
・発信形態は、神戸市ホームページの中に特設サイトを設けることを基本に、関連イベントなどを通じて、高校生などの若年世代を念頭においたものとする。
・年表とテーマごとの記述を柱として体系立てた歴史の発信に努めるとともに、写真やコラムを挿入し、親しみやすい内容とする。

②キックオフミーティング

庁内公募により若手職員を中心に 15 人の職員が1週間に半日程度を目安として参画することとなり、令和４年２月にキックオフミーティングを開催した。事務局において、以下の 28 テーマを提示し、15 人を４グループに

分けてグループ活動を推奨するとともに、個人ごとに概ね２テーマずつ分担執筆することとした。

また、執筆にあたっては、『新修神戸市史』をはじめ各局事業の周年史など神戸市発行の行政資料からの出典をベースとし、積極的な現地取材をコラムとしてまとめることとした。

【28 テーマの一覧】

兵庫開港（神戸開港）
神戸事件
外国人居留地の形成
神戸の学校史
生田川の付替えとフラワーロード
神戸の交通網の発達
鈴木商店とその系譜
神戸市誕生
感染症と上下水道・病院など都市基盤整備
神戸と難民たち
六甲山の開発
神戸港の発展と文化・スポーツの流入
神戸港の発展と感染症
日清戦争後の都市改造
神戸の近代産業の発展
神戸港の発展
市営電気供給事業
都市膨張と社会問題
神戸の自然災害
阪神大水害とその後の復興
神戸大空襲
神戸の戦災復興
市域の拡大
神戸の高度経済成長と公共デベロッパー
ポートアイランド・六甲アイランド
全国に先駆けた生活福祉都市
阪神・淡路大震災
震災からの復興

③執筆・校正

執筆はサマリーページと詳細・コラムページの２段階で行うこととした。参画した職員は文書館や図書館、関係部局に赴き、市史をはじめとした行政資料などの参考文献を調査し、適宜文書館職員からアドバイスを受けながら、担当の原稿を執筆した。

完成した原稿から順次、文書館職員が校正を行った。史実に基づいた記述になっているかの確認はもとより、必要に応じて執筆者の意図を直接確認しながら、原則として２校、テーマによっては３校を実施した。【図１】

テーマによって進捗状況に差が生じることもあったが、サマリー・詳細・コラムページごとに執筆期限や校正期限を定め、事務局で進捗管理を行うことで、できるだけ遅れが出ないよう努めた。

『新修神戸市史』は市制 100 周年を記念した市史編纂であり、概ね昭和期までの市史で

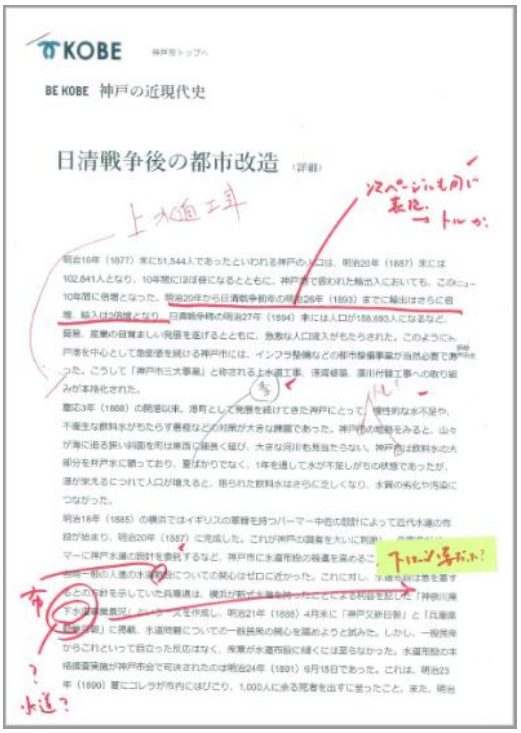
KOBE
BE KOBE 神戸の近現代史
日清戦争後の都市改造

図１　校正の一例

ある。そのため、平成期に入ってからの記述、とりわけ阪神・淡路大震災と復興については、市史に拠ることが難しかった。

④特設サイトの公開

特設サイトの公開は３段階で行った。スピード感をもってプロジェクトを進めていくため、プロジェクト開始から約２か月の段階で、特設サイトを開設することとし、約半数にあたる 12 テーマのサマリーページと年表を 4 月 25 日に公開した。

特設サイトの開設に合わせて、本プロジェクトについて記者資料提供を行い、６月８日の神戸新聞朝刊・神戸面に記事が掲載された。８月 24 日には、すべてのサマリーページと一部の詳細・コラムページを第２弾として公開した。

若年世代の興味を引くサイトとするために、デザインや機能についての検討も重ねた。公開時からスマートフォンでの閲覧を意識したページレイアウトとした。【図 2】

さらに、年表項目の表示／非表示切替え、各ページに掲載した写真を一元的にみられる写真館、操作性を高めるメニューボタンの配置といった機能を拡充していった。すべてのページと機能の拡充が完了し、最終版をリリースしたのは 11 月 30 日であった。

【参考】HP「BE KOBE 神戸の近現代史」
https://www.city.kobe.lg.jp/culture/modern_history/index.html

⑤PR イベントの開催

特設サイトの最終版公開後は、その PR を兼ねて、市民向けのイベントの企画にとりかかった。A～D の４グループでグループごとに企画案を出し合い、年度内に事業を実施していくこととした。

A グループの「はじまりの神戸」トークイベント、B・D グループ合同の「鈴木商店ゆかりのまち歩き」は、いずれも広報紙にイベント開催記事を掲載したが、申し込み開始後 30 分以内に定員が埋まるなど、事務局としてもその人気に驚いた。また、A グループの「はじまりの神戸」トークイベントは、地元紙に取材を受けるなど、神戸の近現代史の発信についての潜在的なニーズの高さを再認識させるものとなった。

図２　スマートフォンビューと PC ビューの比較。
配置は自動で最適化される。

A グループ:「はじまりの神戸」トークイベントの開催

日時・場所；令和５年３月 11 日（土）13:30～（中央区文化センター会議室）

歴史講演会「はじまりの神戸　激動の 30 年と七不思議」

出演者：青山大介氏（鳥瞰図絵師）
　　神木哲男氏（神戸大学名誉教授）
　　潮崎孝代氏（総合インフォメーションセンター長）
　　谷口真澄（神戸市文書館）

内　容：第１部　青山大介氏及び神木哲男氏の講演（各 30 分）
　　第２部　出演者４人のトークセッション（1 時間）

定　員：一般申込者 30 名

図３　「はじまりの神戸」トークイベント会場風景
満員の会場では、一般参加者も交えて活発な議論が交わされた。

B・D グループ合同：鈴木商店ゆかりのまち歩き

日時；令和５年３月５日（日）13:00～15:30

ガイド：小宮由次氏（辰巳会・鈴木商店記念館）
　　金子直三氏（辰巳会・鈴木商店記念館）

内　容：神戸を舞台に世界で活躍した鈴木商店ゆかりの地
　　（創業地や本店跡地など）を訪ね歩く、まち歩きイベント

定　員：一般申込者 30 名

図４　海岸通の本店跡地前にて

当日使用した鈴木商店ゆかりのマップ

C グループ：庁内啓発記事の発信

BE KOBE 近現代史の HP ができるまでの過程について参加者にアンケート、インタビュー（座談会）を実施し、その内容をまとめた記事をデスクネッツ上に掲載した。掲載主旨は、近現代史の HP に興味を持ってもらうとともに、多様な働き方の一つの例として、実際にどのような活動をしていたかを示すことで、同様の活動への参加に興味を持ってもらう。

図５　C グループによる座談会

３．今後の展望

令和４年度の予定がすべて終了した時点で、庁内公募職員と事務局でクロージング・ミーティングを行った。今後の展望や充実策について示された意見は次のとおりである。

・スポーツ
・居留地会議
・神戸港
・雑居地への外国人移住
・農業関連
・神戸ゆかりの“人”
・オーラルヒストリー
・神戸の歴史が国や法律を動かした事例
・市内各エリアの地域おこし
・現地を歩く際の参考となるマップの作成
・各部局の統計データとのリンク
・短い動画の作成による、若年世代への訴求
・「グラフこうべ」の参照
・歴史からくらしを見る視点の充実

こうした充実策に加え、市民への一方通行的な発信からさらに一歩進めて、市民と職員との協働型で、神戸の近現代史を素材に神戸の将来像を考えていく取り組みを検討したい。

4．まとめ

神戸の近現代史を市民向けにわかりやすく発信するプロジェクトは、イベント開催時の感触からしても一定の成果を挙げつつあるように感じる。

また、その前段階として、職員とりわけ若手職員が神戸の近現代の歴史に関心を持ち、それを仕事の中に織り込んでいく目的も、庁内公募職員の積極的な関わりによって、その方向性に一定の手ごたえを感じたところである。

プロジェクトとしては、一旦区切りをつけたが、神戸の近現代史をわかりやすく発信する取り組みを一過性に終わらせるのではなく、引き続き組織的な取り組みとして持続的に進めていきたい。